

If your *nihongo* is a little rusty, please indulge yourself with the translation on the next page.

Foreword by Masahiro Nitta

日本で生まれた楽器、津軽三味線。津軽三味線は職人の技が込められた楽器である。それを、日本人ではない弱冠18歳のカイルが作り上げてしまったという事に大変驚かされた。自分が三味線を始めてから、いつかはこんな奴が出てくるとは思っていたが、こうも早くそのときがくるとは思いもよらなかった。

彼と出会ったのは、2007年にアメリカへ旅をした時の事だった。親友のカリフォルニア三味線奏者、ケビンメッツの紹介で、ケビンからは『三味線を愛しすぎて作ってしまったというすごい奴がいるぞ』と聞かされていた。いざ、ケビンと共にカイルの家へ行くと、まず目に飛び込んできたのは、世界国々の楽器が、そこには並んでいた。そんな国々の楽器に目を奪われていると、カイルが隣にやってきて、何やら嬉しそうにそれを差し出してきた。そう、カイルの作った津軽三味線だ。すぐさまカイルの作った三味線を手に取ってみる。

見た目は手作り感を出す木の色で、出来上がってからまだ時間が経っていないのか木の香りがした。よく見ると多少形は歪だが、とてもきちんと勉強して作ってあるという想いが感じられた。一つの三味線を作り上げるのに、それぞれの部位や部品によってそれ用の職人が担当するのが通常だが、三味線一つ作り上げるのに、カイルはそのすべての工程を一人でやっている事に感銘を受けた。演奏してみると、今まで弾いた事のないような暖かい音の三味線だった。まるで漫画の世界だ。2007年のアメリカの旅では色々体験をしたが、これが一番驚いたことだった。

そして、翌年2008年、彼はもう一本三味線を作りあげていた。前回よりも精度が増し、繊細な部分まで時間をかけ作ってある。音もはっきりと出るようになった。彼は日々進化しているという事を見せつけられた。ここまで詳細に書かれた三味線の本を、今まで見た事がない。なぜならば通常日本は伝統を守る精神をととても大事にする。職人の技を絶対に人に教えないのだ。しかし21世紀になり世界中で津軽三味線を愛する人が増え、その中で彼が現れ、前代未聞の本を作り上げてしまった。このカイルが作った本を期に、今後津軽三味線の職人世界にも新しい息吹が吹きかかった事は間違いない。そして、津軽三味線奏者である僕も、カイルの大変な努力と敬意を受け、津軽三味線の音をもっともっと世界へ広く伝えていきたい。



— 新田昌弘 (Masahiro Nitta)